

スラウェシ市民通信(3) -- パニコ・ビビ -- 海藻を縛る女性たち (連載)

著者	Luna Vidya, 松井 和久[訳]
権利	Copyrights 日本貿易振興機構(ジェトロ)アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	140
ページ	40-43
発行年	2007-05
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00005248

パニコ・グジュ

—海藻を縛る女性たち

ルナ・ヴィドウヤ

マカッサル市の南約六〇キロにあるジェネポント県ポント・ウジュン村。一軒の高床住居の床下で女性が赤ん坊をあやしなから忙しく働いている様子が見える。

彼女のそばには、塗るとひんやりする白粉を顔中に塗った少女たちが座っており、なかに老女も一人いるが、みんなで同じ作業に没頭している。海藻を縛る作業の最中なのだ。彼女らは土地の言葉で「パニコ・グジュ」(panyiko hiji) と呼ばれている。

●パニコ・グジュの仕事

三年ほど前から、南スラウエシ南海岸で海藻の養殖が盛んになるのに合わせて、この村の様々な年齢の女性たちはパニコ・グジュとしての仕事を始めた。三年前まで、この村の女性たちの大半は、日頃の生活について尋ねられると、「ただ家にいるよ」と答えたものだった。しかし今では様子は一変した。海藻養殖が彼女らの答えを「海藻を縛っているのよ」へと変えたのである。彼女らは高床式の家の床下、テント、あるいは海岸や海にせり出したサゴ椰子の葉で葺かれた屋根の竹小屋などに置かれた新

鮮な海藻の山を取り囲んで、集まっておしゃべりをしながら作業する。彼女らの手が新鮮な海藻を選び、切り、成長を促す植えつけができるように海藻を縛る。

このコットニー (cottonii) あるいはスピノサム (spinusun) という名前の種類の海藻 (訳注1) を養殖するに当たっては、男性と女性との間の分担が家族全員で平等になるようにする。すなわち、子ども、大人あるいは親、男性、女性、みんながこの作業に関わるのである。もちろん、それぞれの役割や分量は異なる。

通常、海藻を養殖する場の準備、養育、収穫といった海上での仕事は男性が受け持つ。女性は、海藻の種を植えつける紐を作ったり、海藻を縛ったり、天火乾燥させたりなど、陸上での仕事を多く受け持つ。

養殖する場の面積がさほど広くなければ、陸上での仕事は一家族の成員で分業できる。しかし、海藻の種を植えつける場所となる長い紐 (土地の言葉ではペンタン II Danyu dan と呼ばれる) の数が三〇〇本を超えると、ペンタンを作ったり海藻を縛ったりする作業にはもともとたくさん的人数が必要に

なってくる (訳注2)。

海藻を縛って、海藻の種をペンタンにつける段階は、海藻養殖で最も注意を要する段階である。海藻はすばやく縛らなければならない。もしそうでないと、海藻の茎の部分が苗になるには柔らかくなりすぎてしまふのだ。だから、この段階でのできが収穫を左右するのである。

●なぜ女性が海藻を縛るのか

どうして海藻を縛る作業は女性がほとんどなのか。どうして南海岸地域の男性は海藻を縛らないのか。ポント・ウジュン村の海藻農家の一人ダエン・レワさんによると、海藻苗が茎になっていけそうに十分育つと、作業はよりしんどい段階になる。この段階になると、誰かがペンタンを担いで運び、海中に下ろさなければならぬ。これは男性の仕事なのだ。

ペンタンを運んで海に下ろすのは一日で済ませるのが理想的だ。植えつけた海藻苗の成長力を維持するには、海藻をすばやく選り縛る女性の作業が重要になるのである。女性が海藻苗を縛ってペンタンに仕上げる



パニコ・ビビが赤ん坊をあやし、おしゃべりをしながら作業する (Sainul Rapi 撮影)

間は、男性の休息の時間となる。

女性の作業が重要な理由は他にもある。海藻養殖の技術普及員であるカスマンさんによると、女性の手は繊細なので、女性が作業すると海藻が折れないのである。

技術的には、海藻を縛る作業を覚えるのに時間はさほどかからない。しかし、パニコ・ビビが海藻をどう選び、切り、苗に分けているかをみると、彼女らの役割は単なる「海藻縛り工」に留まらない。海藻の種を植えつける際に、海藻のどの部分が苗として繁殖していくのに最良かを選んで決定するのは、すべてパニコ・ビビの手に委ねられているのである。

彼女らは海藻の苗を分別する作業に最大限の責任を持つ。彼女らの作業をみれば、海藻農家への指導された技術がどの程度吸収されたかが分かるのである。たとえば、よい苗とはいかなるものか、波が高いときに使う苗の大きさはどの程度が適当か、といったことである。換言すれば、この作業は速さが要求されるだけでなく、丁寧さ、判断力、明晰さも要求されるのである。

●海藻養殖で所得が向上

マカッサル語でタナム・アガラツ(tanam agalats)と呼ばれるこの海藻養殖の作業は、全般的に住民の所得を向上させている。女性は、これまで漁業で切れた網の修繕の手伝いをして報酬をもらえなかったのだが、パニコ・ビビの仕事は新しい状況

作り出した。海藻を縛ることで、南海岸の漁村の女性たちは、今では家計に対する経済的貢献を果たせるようになった。

パニコ・ビビには賃金が支払われる。女性は陸上のほかの多くの仕事から日銭を稼ぐことができるはずのだが、これまで、海藻を縛る作業ほどには日銭を稼ぐ機会はなかったのである。

タカラール島のタナ・ケケ村では、パニコ・ビビは現金で賃金が支払われない代わりに、作業の報酬として苗が配られるが、他の地域では、海藻を縛る作業への報酬としてパニコ・ビビには現金で賃金が支払われる。この賃金は、一日の作業で何本のベントタンに海藻を縛ったかに応じて支払われる。約二五メートルの長さのベントタンに苗を縛ると、彼女らは一二〇〇〜一五〇〇ルピア(約二〇円)の報酬を受ける。

報酬額は場所によって異なる。ブルクンバ県ポントバリ村のダエン・ブンガさんの場合は、ベントタン一本につき一五〇〇ルピアである。一方、ジェネポント県アルン・ケケ村では、同じ長さのベントタン一本で一二〇〇ルピアになる。

通常、彼女らは一日に一人当たり五〜一〇本のベントタンに海藻を縛る。もともと、一人で何本のベントタンに海藻を縛るかは、縛る苗の数やそこで働く女性の数などに左右される。最低限の額でみても、パニコ・ビビは一人当たり一週間で四万二〇〇〇ルピアを稼ぐことになる。

また、海藻を縛る作業で毎日賃金を得られるのは、海藻の植え付け期のおおよそ二〜三カ月間に限られる。この季節は「よい季節」と呼ばれている。

ポントバリ村では、この「よい季節」は六〜十一月であり、作業のピークは八〜一〇月になる。これ以外の季節には、パニコ・ビビの作業は毎日ではなくなる。

この集約的な養殖作業のおかげで、毎日最低でも六〇〇〇ルピアの現金を稼げる機会があるということは、海に関わる経済活動としてはとても「ぜいたくな」ことなのである。現金収入が毎日ある、ということがぜいたくなのである。

●金のネックレスを買う

現金収入が毎日あることで、日々の家事に関わる出費に対する不安がなくなったわけではない。ダエン・ブンガさんは、金のネックレスを買うために貯金を始めた。ジェネポント県パツピリンガ村のパニコ・ビビの少女ナスラさんは、今では化粧品を買ったり、中央市場で友だちとバソ(牛肉団子入りスープで、インドネシア全国で最もポピュラーな食べ物の一つ)を食べたりすることができるようになった。

現金収入が毎日あるという、以前なら到底考えられなかった事態は、「十分な食糧を購入できてよかった」という面と同時に、「思い切った借金をしてみよう」という面も引き起こしている。パニコ・ビビが「よ



バンタンを海中に下ろしたり、収穫をしたり、海上の仕事は全て男性の役目 (Muhammad Ridwan Alimuddin 撮影)

い季節」に稼いだ資金で、住民たちはクレジット、とくにバイクを買うためのクレジットを始めるのである。

悲しいことに、彼らの多くは資金管理やクレジット返済の知識に乏しいので、その多くが借金の罠へ陥っていく。そして彼らは、「グループ長」と呼ばれる、資金を持つ海藻集配商人から借金をするのである。

「よい季節」と呼ばれる繁忙期には、パニコ・ビビの労働力を確保するのが難しい場所も出てくる。一つの村や集落で海藻苗作りを行うのは少数の農民であり、十分な数のパニコ・ビビを確保できないケースが少なくないのである。

パニコ・ビビの役割は現状ではとても重要である。彼らが必要とされているが、競争は少ない。こうした状況が、前述のクレジットを借りたり借金をしたりする彼らの決定に影響を与えているのかもしれない。

●女性の研修はまだ少ない

パニコ・ビビも技術情報を伴って地域特有の知識形成に広く関わっており、かつ家計に対するパニコ・ビビの個人的な経済的貢献が潜在的に高いことを考慮するならば、「グループ長」(資金を持っている者)と同様に、パニコ・ビビも海藻に関する研修へ参加するのが当然と考えられる。

しかし、残念ながら、現況では、パニコ・ビビは人的資源の質のエンパワーメントという面で意義のある研修の機会をまだ得

ることができていないどころか、無視されていると言ってもよいような状況にある。海藻養殖に関する研修では、まだまだ男性が優先されるのである。

もっとも、家族レベルでの仕事の分担量を見れば、女性の役割は海藻養殖における男性と同等に重要なのである。

小規模経済運営を目的とした研修において、パニコ・ビビを対象としたものはまだなく、海藻養殖に関する技術指導に留まっているが、この点は批判されるべきである。なぜなら、海岸部の漁村住民の能力向上のためには、男性に対して海藻の適正な植え付け方を、女性に対して海藻シロップの作り方を教える、といった狭い実践的な技術指導だけでは不十分だからである。

こうした南海岸の海藻を縛る女性たちこそ、これまで貧困社会と言われ続けてきた漁村社会の厚生を改善させるための重要な要素なのである。

(Luna Vidya / 国際金融公社プロジェクト)

ト・コデーネーター)

(訳注1) ともにカラギーナンと呼ばれる海藻の一種で、コットニー(Kappaphycus Cottoini) はオオキリンサイ属で硬く強いゲルの材料になり、スピノサム(Burgharina Spinosa) はキリンサイ属で柔らかいゲルの材料になる。カラギーナンはヒトの消化器内ではほとんど分解されない食物繊維と見なされ、また増粘安定剤やゲル化剤な

どとして食品その他工業で用いられる。海藻生産では、フィリピンが国際市場の約八〇%を占めているといわれ、インドネシアもスラウエシを中心に輸出向け海藻生産が急速に盛んになってきた。

(訳注2) この種の海藻の生産では、海中に海藻の種を植えたナイロンロープ(本稿での「バンタン」に相当)などを下ろし、ナイロンロープに生えた海藻を引き上げて収穫する。

〔訳者による解説〕

筆者のルナ・ヴィドゥヤは、世界銀行グループの国際金融公社(IFC)が進める東インドネシア中小事業支援プログラム(PENSA)のコーディネーターを務めている女性であり、現在、南スラウエシ州南海岸の海藻養殖農民のエンパワーメントに取り組んでいる。PENSAに関わる以前から、NGO活動家として活躍しており、パニクルの常連投稿者の一人である。

南スラウエシにおいて、彼女が関わるPENSAは、アグリビジネス・リンクエージプロジェクトを実施しており、そのなかで、海藻に関する市場情報システムの構築や村落レベルでの海藻加工事業への投資促進を進めている。とくに海藻養殖に携わる農民に対して、単なる技術指導に留まらず、海藻の市場価格情報にインターネットを使って農民自身がアクセスできるようにするための支援が行われている。ルナは同プロ



海藻を天日干しにする (Muhammad Ridwan Alimuddin 撮影)

ジェクトのコーディネーターとして、南スラウエシ州南海岸の海藻養殖を行っている村々をまわって、実際に住民と数多くの対話を行っており、そこでの経験が本稿の執筆に生かされている。

インドネシアの海藻生産は年間約九万トンで、そのうちの約三六%、三万五一四〇トン(乾燥状態)が南スラウエシ州で生産されており、とくにオゴノリ類では全国生産の約五八・五%の一万七二〇〇トンを生産している。インドネシア全体で見れば海藻生産の潜在性はきわめて高く、この潜在性が生かされれば、現在世界最大の生産国であるフィリピン以上になることは間違いない。海藻養殖が潜在的に可能な面積は、プア州の五〇万一九〇〇ヘクタールを筆頭に、マルク州で二〇万六六〇〇ヘクタール、中スラウエシ州で一〇万六三〇〇ヘクタール、ナングロ・アチェ・ダルサラーム州で一〇万四一〇〇ヘクタール、東南スラウエシ州で八万三〇〇〇ヘクタール、本稿で取り上げた南スラウエシ州でも二万六五〇〇ヘクタールある(以上、『コンパス』二〇〇七年三月一三日)。海藻養殖の潜在性が高いのは、インドネシア東部地域を中心に、いずれも経済的に後進とされる地域であり、海藻養殖が後進地開発にとって重要な役割を果たすことが期待される。

本稿に出てくるタカラル州やジェネポント県は、南スラウエシ州でも最も貧しい地域として知られる。とくに海岸に近い農

村部は土地がやせ、乾季が長く降水量に恵まれないため、男性の多くはベチャ(輪タク)曳きとして毎月マカッサルなどの都市へ出稼ぎするのが普通だった。男性はベチャ曳きで稼いだ資金でコメを買い、毎月それを持って村へ帰るのである。男性の帰りを家で待つ女性の副業としては、乾燥地でも育つロンタラ椰子の繊維を使ったカゴ、帽子、置物などの工芸品の生産や、同じくそこで生産される素焼きの小瓶の外側をロンタラ椰子繊維で包むなどの工夫が、地方政府の指導により、一〇年ぐらい前から行われてはきた。これらの一部は、今では南スラウエシ州の新しい土産物の一つとして市場に認知されるに至った。

タカラル州やジェネポント県の海岸部の漁村は、天候に大きく左右され、かつ伝統的な漁具や漁法による漁業に依存するため、つねに貧困地域の代名詞とみなされてきた。そしてこれらの漁村では、男性が漁に出ていた間、女性は家で何もせずただ男性が帰るのを待っているだけ、というのが長い間一般的だったのである。前述のロンタラ椰子繊維の加工も、この地域の漁村部にはまだ広がらなかった。それが、彼らの副業として海藻養殖が始まって以来、家にいるだけだった女性が海藻を縛る作業で現金収入を得られるようになり、本稿で述べられているような様々な社会変化が見られるようになってきたのである。

果たして、海藻養殖は南スラウエシの南

海岸の漁村部の住民を貧困から解放する切り札となるのであろうか。海藻養殖自体はこの土地の伝統に由来するものではなく、国際市場の需要に対応して、フィリピンに続く生産地として、先進国企業の側が位置づけているのである。この南スラウエシで養殖されるカラギーナンが他の同種のものよりも品質的に優れていることが立証されれば、生産地間の国際競争に生き残れるかもしれない。いずれにせよ、労働コストや作業の丁寧さなどの点では、他地域との厳しい競争にさらされよう。

もともと、住民はそんな国際競争などということまでは意識していないだろう。何も収入がなかった彼女らが定期的な現金収入を得られるようになって、生活が多少楽になったことを素直に喜んでいたのである。そして、定期収入を念頭において借金に手を出していく。農村部や漁村部ではいまだに高利貸から借金をするケースが少なくなく、その借金返済で家計が窮乏化して貧困感が増す場合も多いと聞く。海藻養殖に加えて、住民間でのマイクロクレジットなどの策を今から講じていく必要がある。

海藻養殖をめぐる国際市場と日々の生活との狭間で、彼女らは海藻を縛り続ける。その彼女らと我々は、毎日消費する食品や化粧品を通じてつながっているのである。

(まつい かずひさ/在マカッサル海外調査員)